

〈調査報告〉

## スクールソーシャルワーク実践における アセスメント研究

井 上 直 子\*

An assessment study in the school social work practice

Naoko Inoue

**要旨：**2008（平成20）年より、文部科学省によって「スクールソーシャルワーカー活用事業」が行われている。実践されている学校現場は小・中学校といった義務教育に特化している。一方、大学においても多様な問題が生じ、最近ではキャンパス・ソーシャルワーカーを設置する大学が増えている。ソーシャルワークにおいて、効果的なアセスメントを行うには、情報収集が鍵となる。貴重な情報を得るには、生活の実態を知ることであり、生活の側から解決策を探る必要がある。本研究では、生活を表したソーシャルワークのツール（太田、2005）、生活満足度、これに関係する特性的自己効力感と楽観性を量的調査・分析を行った。この結果によって、大学生の生活満足度と特性的自己効力感や楽観性を、予測できる要因を生活の中から探り、スクールソーシャルワークを行う際の、効果的なアセスメントの提示を目的とする。

大学生を対象とし、生活満足感、特性的自己効力感、楽観性の関連を調査、分析した結果、相関関係にあることが得られた。また、生活を表したソーシャルワークのツールとの関連をみた結果、生活満足度、特性的自己効力感、楽観性のそれぞれに有意な関連が得られた。本研究によって、生活満足度、特性的自己効力感、楽観性は、「家族」「特性」「周辺」が、予測できる要因として考えられることが明らかとなった。

**Abstract：**“School Social Worker Practical Use Project” has been performed by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology on 2008 (Heisei 20). The school sites currently being practiced are specialized in compulsory education such as elementary and junior high schools. On the other hand, since various problems arise also in colleges, the colleges that adopt campus social workers are increasing in number these days. In social work, in order to perform effective assessment, information gathering serves as a key. In order to acquire precious information, it is necessary to know the actual condition of life and to seek for solutions from the side of life. In this study, quantitative investigation and analysis were conducted to the social work tools describing life (Ota, 2005 a), life satisfaction degree, and characteristic self-efficacy and optimism related to this. The factors that can predict life satisfaction degree, characteristic self-efficacy, and optimism of college students are sought from this result so as to present effective assessment when performing school social work.

---

\*関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻 学生

As a result of investigating and analyzing the relation of life satisfaction, characteristic self-efficacy, and optimism targeting college students, it was found out that they were in correlation. In addition, as a result of checking relation with the social work tools describing life, it was found out that there were significant relation in each of life satisfaction, characteristic self-efficacy, and optimism. By this study, it became clear that life satisfaction degree, characteristic self-efficacy, and optimism can be considered the factors that can be predictable “family”, “characteristics” and “periphery”.

**Key words** : スクールソーシャルワーク the school social work アセスメント assessment 楽観性 optimism 自己効力感 self-efficacy

## I はじめに

近年、小・中学校では、教師では対処しきれない、いじめ、不登校、非行といった問題行動や、発達障害に関わる課題、そして児童虐待等といった種々の問題が生じている。このような背景から、2008（平成 20）年に、文部科学省が「スクールソーシャルワーカー活用事業」を実施し、スクールソーシャルワーカーを全国の約 140 箇所配置している。文部科学省から出された報告書（2009）<sup>1)</sup>の中で、スクールソーシャルワークについて、「ソーシャルワークでは、問題は個人と環境の不適合状態、つまり折り合いがよくない状態として捉える。この場合の環境とは、家族や友人などのミクロレベルから学校や社会などのマクロなレベルまでを指す。この不適合状態を解消する考え方として、一つは、個人の側により焦点を当てて、環境とうまく折り合うことができるよう対応力を高めるアプローチと、環境側に働きかけて問題を解決できるよう調整するというアプローチがある。つまり、ソーシャルワークの特徴としては、個人に働きかけようとするだけでなく、環境にも、あるいは個人と環境との関係にも働きかける視点を持つということである。したがって、スクールソーシャルワークとは、このようなソーシャルワークの視点・方法論を持って学校等の教育現場を基盤にして行う活動であると言える。」とある。

教育委員会が関わっての学校ソーシャルワーク関連事業は、1950 年（昭和 25）年から実施されてきたが、「スクールソーシャルワーク（スクールソーシャルワーカー）」と明記されたのは、2000（平成 12）年の赤穂市（兵庫県）と結城市（茨城県）の自治体独自の取り組みからである。赤穂市の「スクールソーシャルワーク推進事業」は大学との連携によって実施され、結城市は市職員（2 名）をソーシャルワーカーに充てている。この後、大阪府による「スクールソーシャルワーカー派遣事業」や、群馬県などにおいてスクールソーシャルワーカー配置事業が展開されている（大崎、2008）<sup>2)</sup>。

このようにソーシャルワーカーの配置が進歩しているが、ソーシャルワークを実践している学校現場は小・中学校といった義務教育に特化されている（米村他、2009）<sup>3)</sup>。しかし、藤原（2009）<sup>4)</sup>は、高校や大学においても、教師が対処するには困難な問題が生じていると指摘し、ある高校におけるスクールソーシャルワーカーの活動内容から、「精神疾患を発病し問題行動を繰り返しているケース」「保護観察中のケース」「犯罪被害者となったケース」等の問題が生じていると述べている。米村他（2009）<sup>5)</sup>は、ある大学で行われているソーシャルワーク援助の実践を検証し、「大学における中途退学者の増加」、「単位不良学生への支援等の問題」といったことから、大学の相談室に持ち込まれる学生からの相談内容が多岐にわたることを導

きだし、大学でのソーシャルワークの必要性を明らかにしている。以上のように、スクールソーシャルワークの対象者は、大学生も含まれ、今日では大学内にキャンパス・ソーシャルワーカー（CSWer）が配置されるようになっていく。

ソーシャルワークの実践においては、利用者や家族をいかに支援するかということに関する検討ももちろん重要であるが、その前提となる対象をいかに理解するかということについても重要視されなければならない。そのために、利用者についての多方面からの情報収集といったアセスメントが行われている（空閑、2009）<sup>6)</sup>。

文部科学省から出された報告書（2009）では、「アセスメント」について、「見立てとも言われ、解決すべき問題や課題のある事例（事象）の家族や地域、関係者などの情報から、なぜそのような状態に至ったかを探ること。そして、硬直している状態をいったん本人や家族の視点に立って見ることで、本人や家族のニーズを理解することもできる。」と記されている。

スクールソーシャルワークの実践展開について門田（2008）<sup>7)</sup>は、「アウトリーチ」「アセスメント」「支援計画」「支援計画の実行」「評価」と進み、スクールソーシャルワーカーは子どもの状況を「アセスメント」するために、アセスメント用紙を用いて、学校関係者等から子どもの環境状況について情報収集と情報分析を行う必要があると述べている。このとき、ソーシャルワーカーはソーシャルワークの視点が反映されるアセスメント用紙を活用していくことが欠かせないと述べている。また、門田（2008）<sup>8)</sup>は、「アセスメント」の目的はクライアントとその環境との関係性を理解することであるとしている。そして、アセスメントは「クライアントのニーズを尊重しながら、クライアントや環境、または双方に変化をもたらしていくための計画の基礎となる。」と定義している。このことから、ソーシャルワークにおけるアセスメントは、人と社会環境の関係性、そし

て人間関係での状況理解に重点をおいたものであると考察することができる。

この「アセスメント」が行われるとき、滋賀県教育委員会では、支援計画（P）、支援の実践（D）、支援の評価・分析（C）、再アセスメント（A）のサイクルを繰り返し、学校現場にアセスメントを定着させていくという「B-PDCA サイクル」による支援の継続を図っていくために、アセスメントのためのベースシート（児童生徒や家族にかかわる情報などを項目にしたがって記述）を開発している（文部科学省、2009b）<sup>9)</sup>。アセスメント・シートはこの他に、奥村によって考案された教育支援アセスメント表や、カンファレンスシート（岩崎、2008）<sup>10)</sup>をアセスメント時に使用する場合もある。

アセスメントに必要なデータについて、文屋（2002）<sup>11)</sup>は、①クライアント個人を理解するための情報、②クライアントの「問題」に関する情報、③クライアントの生活に深いかわりのある人についての情報、と大きく3つに分け、生活にかかわる情報収集をあげている。また、奥村（2006）<sup>12)</sup>は、アセスメントを行うとき、情報収集するうえで必要最小限と思われる項目として、①身体的側面、②精神的側面、③日常生活面、④経済的側面、⑤住居環境面、⑥社会交流面、⑦家族関係面、⑧職業生活面、⑨自己実現面、⑩その他といった、利用者の生活の諸側面を想定した10項目をあげている。効果的なアセスメントを行うことは、利用者の生活の情報収集することだと考えられる。

本研究では、生活を表したソーシャルワーク教育支援ツール（太田、2005）<sup>13)</sup>、生活満足度、これに関係する特性的自己効力感と楽観性を量的調査・分析を行った。この結果によって、ソーシャルワーク教育支援ツールのカテゴリーの中から、大学生の生活満足度と特性的自己効力感や楽観性を予測できる要因について探り、スクールソーシャルワークを行う際の、効果的なアセスメントの提示を目的とする。

## Ⅱ 方 法

### 1. 調査対象

A 県内の大学で、社会福祉学を専攻する 1 年生の学生 99 名 (男性 42 名、女性 57 名) であった。

### 2. 手続き

下記のソーシャルワークのツールと 3 つの自己評定式尺度から構成された調査用紙を、大学の講義時間に配布し、1 週間後に回収した。

### 3. 調査用紙

(1) ソーシャルワーク教育支援ツール (太田他、2005)<sup>13)</sup> (以下、支援ツール)。

支援ツールは、太田が提唱するエコシステム構想において使われるツールであり、情報を即座に収集、分析し、処理するために作成されている。エコシステム構想とは、「生活支援に必要な情報についてコンピューターを介して利用者とソーシャルワーカーが共有し、支援活動を科学化する方法である。そのために生活という生きた状況の把握を、詳細な情報因子に分解して、コンピューターを用いたシミュレーションを通じて、理解しやすいビジュアルな情報へと処理・加工し、支援に必要な素材を利用者とソーシャルワーカーに提供することから、支援活動を利用者との参加と協働のもとに推進しようというアイデアである。」(太田他、2005)<sup>14)</sup>。

ソーシャルワーカーが利用者を支援するためには、利用者の生活の状況を表した多量の生活情報を必要とする。本ツールは、6 階層で構成され、最上位の①「生活」という広がり全体を、順次カテゴリーとして配列している。次に、生活を大別して、②「人間・環境」の 2 つの生活領域に分割している。それら生活領域を③「当事者・基盤・周辺・支援」の 4 つの生活分野に分割している。それら生活分野を④「特性・問題・身辺・家族・近辺・資源・機関・ネットワーク」の 8 つの属性に分割している。さ

らに、各属性を 4 分割し、⑤32 の生活内容で配列している。そして、⑥各生活内容に実践の構成要素 (価値、知識、方策、方法) で構成された 4 つの質問項目と組み合わせ、合計 128 因子によって、ミクロからマクロにわたる生活内容をとらえている。支援ツールは、これら質問内容に、6 つの選択肢 (1: 考えている、2: ある程度考えている、3: あまり考えていない、4: 考えていない、5: 事例に情報が無い、6: 未回答) から回答する。本研究では、因子を領域、分野、属性の各カテゴリーで分析した。

使用した支援ツールは、ソーシャルワーカーに将来なろうとする学生の養成のためのツールであり、本来の使い方をしていない。しかし、本研究においては、支援ツールで使われているカテゴリーを使って、被験者の生活を明らかにし、分析するために使用した。

(2) 生活満足度尺度 (Life Satisfactin Index K: 以下、LSIK) (古谷野他、1989)<sup>15)</sup>。

これまで主観的幸福感の測定の研究として、改訂 PGC モラル・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) (Gawton, 1975)<sup>16)</sup> や生活満足度尺度 A (Life Satisfaction Index A; 以下、LSIA) (Neugarten, et al, 1961)<sup>17)</sup> といった測定尺度が開発されてきた。しかし、George (1981)<sup>18)</sup> は、生活満足度の概念を「生活全体もしくは人生全体についての認知的な評価を意味し (認知-長期的)、幸福感は一過性で変化しやすい感情を意味する (感情-短期的)」と明確に定義している。

本研究で使用した尺度は、George の枠組みを用いて、PGC モラル・スケールと LSIA の下位次元について行われた概念的な検討の結果 (古谷野他、1989)<sup>15)</sup> に基づいて作成された、9 項目からなる測定尺度で構成されている。

(3) 特性的自己効力感尺度 (Generalized Self-Efficacy 尺度: 以下、SE 尺度) 日本語版 (成田他、1995)<sup>19)</sup>。

SE 尺度の日本語版は、Sherer et al. (1982)<sup>20)</sup>

の尺度を翻訳して作成されている。自己効力感とは、Bandura によって個人の行動の遂行能力に対する確信の程度と捉えて、提唱されている。このことを具体的に述べれば、人が何かに挑戦する場合、2つの期待があり、1つは「結果期待」で、どの程度の結果を出せるか、出したいかという期待で、成功への自信だとされている。あとの1つは、結果を出すために、自分でどの程度の行動が出来るかという期待で、行動することへの自信だとされている。

特性的自己効力感とは、特定の課題や問題における自己効力感ではなく、他の事象にまでも一般化した自己効力感を指している。よって、特性的自己効力感の個人差を測定することは、個人の行動を予測し制御する上で非常に重要だと考えられている。SE 尺度の日本語版の基となる尺度を作成した Sherer et al. (1982)<sup>20)</sup>は主に、①「行動を起こす意思、②行動を完了しようと努力する意思、③逆境における忍耐、などの社会的スキルや職業的能力の36項目から構成された SE 尺度の項目を作成した。そして、36項目からなる SE 尺度の因子分析結果に基づいて、最終的に SE 尺度の代表項目として23項目を選出している。Sherer et al. (1982)<sup>21)</sup>は SE 尺度を因子分析した結果、一般性因子と社会性因子の2因子で構成されるとしている。しかし、SE 尺度の日本語版 (成田他、1995)<sup>22)</sup>では、性や年齢によらず安定した1因子構造を示している。また、SE 尺度の日本語版 (成田他、1995)<sup>23)</sup>の内的一貫性を確認するための Cronbach の  $\alpha$  係数では、性、年齢群に関係なく0.8以上の値を示している。さらに、①20項目からなる抑うつ性尺度 (CES-D)、②10項目からなる自尊心尺度、③40項目からなる性役割尺度 (BSRI)、④1項目評定法による主観的健康感尺度を用いて、SE 尺度の日本語版との関係を検討している。その結果、抑うつ性尺度との関係は、男女、年齢群を問わず負の相関を示している。自尊心尺度とは、男女、年齢群で比較的高い相関値を示している。また、性役割

尺度とは、18-24歳群で低い相関値であるが、その他の年齢群では中程度の相関を示している。主観的健康感との相関では、主観的健康感尺度が1項目評定法のため、尺度としての信頼性が低くなり、弱い相関しか認められていない。いずれにしても、以上の結果から SE 尺度の日本語版は全体として、性、年齢群に関係なく、妥当性を持つ尺度だと表している (成田他、1995)<sup>24)</sup>。

本研究では、この SE 尺度の日本語版を4件法 (1:まったくあてはまらない~4:よくあてはまる) によって評価している。

(4) 楽観性尺度 (Life Orientation Test: 以下、LOT) 日本語版 (戸ヶ崎、1993)<sup>25)</sup>。

LOT 日本語版は、LOT 原版 (Scheier & Carver, 1985)<sup>26)</sup>を翻訳したものであり、「物事がうまく進み、悪いことよりも良いことが生じらるだろうという信念を一般的に持つ傾向」であるオプティミズム傾向 (Scheier & Carver, 1985)<sup>27)</sup>を測定する尺度である。主因子法、およびバリマックス回転による因子分析によって、「現在と将来に対するポジティブな思考 (以下、P 思考)」と「過去に対するネガティブな思考 (以下、N 思考)」の2つの因子構造が示されている。また、①12領域の身体的自覚症と、6領域の精神的自覚症に関する下位尺度項目から構成され、心身両面にわたる自覚症状を明らかにし、精神症傾向の判別可能な健康調査票 (CMI) (金久他、1983)<sup>28)</sup>、②「心理的安定感」「意欲」「体調」「生活行動習慣」の4因子から構成される健康感尺度 (相馬他、1989)<sup>29)</sup>、③「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3因子から構成される一般性セルフエフィカシー尺度 (GSES) (坂野他、1986)<sup>30)</sup>、④抑うつ状態に関連する20項目から構成される抑うつ性尺度 (SDS) (福田他、1974)<sup>31)</sup>などの尺度を用いて、LOT と各尺度との関係を示している (戸ヶ崎、1993)<sup>32)</sup>。回答方法は、4件法 (1:全くそうは思わない~全くそう思う) によって評価

されている。

戸ヶ崎(1993)<sup>32)</sup>の報告によれば、LOT と CMI の関係では、オプティミズムは身体的・精神的自覚症の頻度と深い関係があり、オプティミズム傾向が低いほど身体的・精神的自覚症の頻度が多くなることを示している。LOT と健康感尺度の関係では、現在・将来をポジティブに考えることによって、主観的健康感が高まり、物事をポジティブに考えることができる者は、体調がよいと感じ、意欲も高く、心理的に安定した生活を送ることができるということが示唆されている。また、LOT と GSES の関係では、現在と将来に対してポジティブな思考 (P 思考) をする傾向が強い者は、セルフ・エフィカシーが高く、失敗に対する不安を感じることなく積極的に行動することができる傾向をもっていることを示している。そして、LOT と SDS の関連は、抑うつ傾向とペシミスト的な思考との間には深い関係があるとしている。男子では、「P 思考」が高得点、または「N 思考」が低得点である者が抑うつ感は少ない。一方、女

子では、「P 思考」が低得点で、「N 思考」が高得点であるほど、抑うつ感が高い傾向にあることを明らかにしている。以上の結果から、現在および将来に対してポジティブに考えることのできる傾向の強い人は、身体的、精神的に抑うつ感を自覚される傾向が少なく、同時に主観的に自分が健康だと感じ、オプティミストは主観的に健康であることを示している。

### Ⅲ 結 果

#### 1. 記述統計量 (Table 1)

Table 1 は、各尺度と支援ツールの全体 (男女の合計) 及び男女別の平均値、標準偏差と、性差の有意性の検討を行った *t* 検定の結果を示している。*t* 値から、支援ツールの属性「問題」と「ネットワーク」において、男性よりも女性のほうが得点は高かった (「問題」*t*(97) = 2.08, *p* < .05, 「ネットワーク」*t*(97) = 2.05, *p* < .05)。

このことから、女性よりも男性のほうが、生活の「問題」に向き合おうと考え、「問題」が

Table 1 各尺度の全体 (男女合計) 及び男女別の平均値と標準偏差

尺 度	全体 (N=99)		男 (N=42)		女 (N=57)		t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
支援ツール生活 領域	1 人間	138.67	32.33	132.60	34.57	143.14	30.10	1.62
	2 環境	211.23	53.70	201.74	52.97	218.23	53.61	1.52
分野	I 当事者	71.56	17.86	68.69	17.92	73.67	17.67	1.38
	II 基盤	67.11	17.30	63.90	18.19	69.47	16.37	1.60
	III 周辺	114.65	32.06	109.88	32.84	118.16	31.29	1.27
	IV 支援	96.59	28.65	91.86	26.60	100.07	29.83	1.42
属性	(1) 特性	31.45	8.73	31.33	9.11	31.54	8.52	.91
	(2) 問題	40.10	11.45	37.36	10.35	42.12	11.88	.04*
	(3) 身辺	33.20	9.01	32.26	9.77	33.89	8.43	.38
	(4) 家族	33.91	10.89	31.64	11.57	35.58	10.13	.08
	(5) 近辺	35.05	10.83	34.00	10.86	35.82	10.85	.41
	(6) 資源	79.60	22.18	75.88	23.00	82.33	21.34	.15
	(7) 機関	51.30	16.20	50.00	16.41	52.26	16.12	.49
	(8) ネットワーク	45.28	14.54	41.86	12.35	47.81	15.58	.04*
LSIK	15.16	2.02	15.05	1.97	15.25	2.07	.63	
SE	60.32	8.94	59.00	9.21	61.26	8.70	.22	
LOT	32.07	5.12	33.17	5.27	31.26	4.89	.07	

\**p* < .05

Note: 支援ツール = ソーシャルワーク教育支援ツール; LSIK = 生活満足度; SE = 特性的自己効力感; LOT = 楽観性

**Table 2** 各尺度間の相関係数

	LSIK	SE	LOT
LSIK			
SE	.272**		
LOT	-.480**	-.351**	

\*\* $p < .01$ 

Note: LSIK = 生活満足度

SE = 特性的自己効力感

LOT = 楽観性

生じたいきさつや核心を理解する傾向があり、「問題」への取り組みを改善する期待を持ち、「問題」への対応を進展させている傾向が強いと考えられた。また、「ネットワーク」については、地域ぐるみの協働した「ネットワーク」を理解し、「ネットワーク・サービス」を利用し、それを役立て、そして地域ぐるみのネットワークに働きかけている傾向が強いことが示唆された。

## 2. 各尺度間の相関係数 (Table 2)

生活満足度、特性的自己効力感、楽観性の関連を検討するために、各尺度間の相関係数を算出した。生活満足度は特性的自己効力感との間に正の相関がみられた ( $r = .272, p < .01$ )。この結果から、人生全体に対して満足感が高く、心理的に安定していると、自己効力感が高いことが明らかとなった。楽観性と生活満足度 ( $r = -.480, p < .01$ )、楽観性と特性的自己効力感 ( $r = -.351, p < .01$ ) との間に負の相関がみられた。この結果から、物事がうまくはかどらず、悪い結果を予測するような悲観的傾向であると、生活への満足感が低く、物事に積極的に取り組む気持ちも低いことが示された。

## 3. 重回帰分析 (Table 3、4、5)

支援ツールの変数とする 8 つの属性から、生活満足度、特性的自己効力感、楽観性を予測するために、重回帰分析を行った。ステップワイズ分析を行ったところ、生活満足度は支援ツールの属性の「家族」のみ回帰式に投入される結

**Table 3** 従属変数を生活満足度、独立変数を支援ツールにした重回帰分析の結果

予測変数	$\beta$	$R^2$	$t$	$F$
支援ツール「家族」	.216	.047	2.179	4.749*

\* $p < .05$  $\beta$  標準回帰係数 $R^2$  説明率 (決定係数)**Table 4** 従属変数を特性的自己効力感、独立変数を支援ツールにした重回帰分析の結果

予測変数	$\beta$	$R^2$	$t$	$F$
支援ツール「特性」	.368	.285	3.732	38.232*
「身辺」	.305	.350	3.096	25.617*

\* $p < .001$  $\beta$  標準回帰係数 $R^2$  説明率 (決定係数)**Table 5** 従属変数を楽観性、独立変数を支援ツールにした重回帰分析の結果

予測変数	$\beta$	$R^2$	$t$	$F$
支援ツール「周辺」	-.233	.054	-2.356	5.552*

\* $p < .05$  $\beta$  標準回帰係数 $R^2$  説明率 (決定係数)

果が得られた (Table 3)。特性的自己効力感は属性の「特性、身辺」の重回帰式に投入される結果が得られた (Table 4)。楽観性は分野の「周辺」の重回帰式に投入される結果が得られた (Table 5)。

## IV 考 察

これまでの主観的幸福感、主に生きがいや生きがい感の測定 (古谷野、1981)<sup>33)</sup>に関する研究が行われてきた。自己効力感の研究では、臨床・教育場面での行動の変容を予測する要因である (坂野、1993)<sup>34)</sup> といったことに主眼がおかれてきたが、近年では、生きがい感 (園田、2001; 吉尾、2004)<sup>35, 36)</sup>、精神的健康との関連や運動やトレーニングといった行動との関

連(竹中他、2002)<sup>37)</sup>について研究されている。楽観性については、オプティミストは主観的に健康である(戸ヶ崎、1993)<sup>38)</sup>といったように、身体的・精神的自覚症状との関連性について研究されてきた。

本研究では、社会福祉を専攻する大学生を対象に、①生活満足度、特性的自己効力感、楽観性の関係性を検討した。その結果、生活満足度と特性的自己効力感には、正の相関関係がある結果を得た。これは、生活満足度が高ければ、社会生活に参加するとき、成功できると自信を持って行動し、生活意欲の向上を図り、生活の構築をめざしていると考えられた。しかし、生活満足度と楽観性、特性的自己効力感と楽観性の関係では、負の相関が示された。これは、生活満足度と特性的自己効力感が低ければ、物事を悲観的に捉える傾向があると、本研究によって明らかになった。

次に、②生活満足度、特性的自己効力感、楽観性を予測するソーシャルワークの教育支援ツールを使って、生活を表す変数(属性)を明らかにし、効果的なアセスメントの提示を目的として検討した。その結果、本研究において、生活満足度を予測する生活の変数(属性)は「家族」と示唆された。支援ツールの中の「家族」では、当事者の家族による相互理解といった「理解」、家族としての役割の分担や協力といった「連帯」、問題解決に対する意欲や取り組み状況といった「意欲」、家族による周りの人びと(近隣、地域、サークル、職場等)との交流といった「社会性」について質問している。よって、支援ツールでの「家族」の質問内容は、家族状況を家族の特性として理解・連帯・意欲・社会性の因子群から把握する構成となっている。本研究の結果によって、当事者が家族とわかり合い、互いに協力し合い、何かに取り組んでいくとともに、当事者だけでなく家族も、家族以外の人々との交流を持つということが、満足した生活を送るうえで役に立つということが明らかとなった。

次に、特性的自己効力感を予測する変数は、「特性」と「身辺」と示唆された。「特性」とは、社会生活に対するものの考え方、姿勢や態度といった「個別特性」、自己に対する考え方や理解といった「自己認識」、出会う人びと、出来事や社会に対する理解や関心といった「社会認識」、周りを見渡し自主的に対応する姿勢や態度といった「社会的自律性」を表している。よって、支援ツールの「特性」は、利用者の固有特性を個別・自己・社会・自己統制力の因子群から把握する項目で構成された内容となっている。本研究の結果から、利用者が社会生活を送りながら何に価値を見出し、利用者自身が物事をどのように考えているか、他者への理解や、周囲の出来事に対して関心をもって取り組んでいるかが、満足した生活を送るうえで役に立つという示唆を得た。「身辺」とは、心身の健康状態への関心や気配りといった「健康」、生活をめぐる経済的側面の状況や見通しといった「生計」、住まいと設備や利用の条件や整備状況といった「住居」、身近な生活環境(公共施設や場所・時間や空間)の状況といった「生活環境」を表している。支援ツールの「身辺」では、身辺状況という生活基盤を健康・生計・住居・生活拠点の因子群から把握する項目で構成されている。本研究の結果、関心を持ち、何らかの工夫をすることは、特性的自己効力感に効果があるという結果を得た。

楽観性を予測する変数は、分野の「周辺」と示唆された。支援ツールの分野の「周辺」は、身近な周辺環境を交流のある人的資源と社会福祉への資源から把握する主な項目で、属性の「近辺」と「資源」で構成されている。「近辺」は、身近な周辺環境状況を近親・近隣・友人・ボランティアの因子群から把握する項目と内容で構成され、「資源」は、社会福祉資源の状況を施策・施設・行政・コミュニティの因子群から把握する項目と内容で構成されている。本研究の結果から、利用者が近親者といった身近な人たちだけでなく、広がりのある交流を持ち、

色々な領域の社会資源を活用しながら生活することは、楽観性に関係するという結果を得た。

本研究によって、ソーシャルワーク教育支援ツールを使って、生活という変数の中から生活満足度や特性的自己効力感、楽観性といったことを予測することを明らかにされた。ソーシャルワーカーが大学生に対してソーシャルワークを行う場合、利用者（大学生）が他者との関わりに積極的に取り組んでいるかを検討し、家庭・近隣・地域・社会といった、ミクロからマクロに渡る生活領域で、利用者が自分自身を理解し、周囲に合わせながら行動しているかといった情報を収集し、アセスメントすることは重要である。そのために、利用者の生活と、生活満足度、行動に対する意欲ややる気といった自己効力感や楽観性との関係を知ることも必要だと思われる。このようなことから、本研究において使用したソーシャルワーク教育支援ツールを使って調査・分析することは、利用者（大学生）の情報を得られたことから、有効だったと思われる。しかし、これまでに支援ツールを使った量的調査がなく、先行研究から導かれた結果との比較・検討が行えなかったことから、支援ツールを使った調査・研究を実施していきたい。今後の検討する課題として、今回調査した大学生は、社会福祉学を専攻する1年生が対象で、調査人数も99名と少なかったことから、被験者の在籍学部、年齢、人数が限定され、調査結果に偏りがあったと思われる。よって、社会福祉学以外の領域を専攻する、他学年の多くの学生についても調査を行う必要があると思われる。また、本研究で使用したソーシャルワーク教育支援ツールは、ソーシャルワーカーに将来なろうとする学生の養成のためのツールだったことから、大学生を利用者として開発されたツールの調査が、必要である。今後は、大学生が抱える問題との関連性についても調査し、効果的なアセスメントについて検討したい。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省・教育相談等に関する調査研究協力者会議 (2009) 「児童生徒の教育相談の充実についてー生き生きとした子どもを育てる相談体制づくりー(報告)」 p.27
- 2) 大崎広行 (2008) 「日本における学校ソーシャルワークの萌芽」『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中央法規、p.35
- 3) 米村美奈・杉田くるみ (2009) 「スクールソーシャルワーカーの役割としての被害・加害関係の修復」『2009年度第4回大会報告要旨集 学校ソーシャルワークの定着に向けて』日本学校ソーシャルワーク学会、p.32-33
- 4) 藤原正範 (2009) 「スクールソーシャルワーカーの役割としての被害・加害関係の修復」『2009年度第4回大会報告要旨集 学校ソーシャルワークの定着に向けて』日本学校ソーシャルワーク学会、p.19-21
- 5) 米村美奈他、前掲書
- 6) 空閑浩人 (2009) 「ソーシャルワーク入門 相談援助の基盤と専門職」ミネルヴァ書房、p.120
- 7) 門田光司 (2008) 「学校ソーシャルワークの実践課程と実践モデル」『スクールソーシャルワーカー養成テキスト』中法法規、p.71-73
- 8) 同書、p.76
- 9) 文部科学省、前掲報告書、p.29-30
- 10) 岩崎久志 (2008) 「支援ケース会議の展開」『学校ソーシャルワーク入門』中法法規、p.120-121
- 11) 文屋典子 (2002) 「アセスメント」黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編著『ソーシャルワーク』中央法規、p.82-85
- 12) 奥村ますみ (2006) 「実践課程に沿った記録」副田あけみ・小嶋章吾編著『ソーシャルワーク記録 理論と技法』誠信書房、p.58
- 13) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和 (2005) 「ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング 利用者参加へのコンピューター支援」中央法規
- 14) 太田義弘他、同書、p.29
- 15) 古谷野亘、柴田博、芳賀博、須山靖男 (1989) 「生活満足度尺度の構造」『老年社会科学』Vol.11、p.99-115
- 16) Gawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. Journal of Gerontology, 30, p.85-89
- 17) Neugarten, B. L., Havighurst, R. J. & Tobin, S. S. 1961 The measurement of life satisfaction. Jour-

- nal of Gerontology, 16. p.134-143
- 18) George, L. K. 1981 Subjective well-being : Conceptual and methodological issues. Annual Review of Gerontology and Geriatrics, 2. p.345-382
- 19) 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子(1995)「特性自己効力感尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る」『教育心理学研究』第43巻第3号、p.306-314
- 20) Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. 1982 The self-efficacy scale : Construction and validation. Psychological Reports, 51, p.663-671
- 21) 同論文
- 22) 成田健一他、前掲書
- 23) 同論文
- 24) 同論文
- 25) 戸ヶ崎泰子・坂野雄二(1993)「オプティミストは健康か?」『健康心理学研究』Vol.6、No 2、p.1-11
- 26) Scheier, M. F., Carver, C. S. 1985 Optimism, coping, and health : Assessment and implications of generalized outcome expectancies. Health Psychology, 4, p.219-247
- 27) 同論文
- 28) 金久卓也・深町建(1983)「コーネル・メディカル・インデックス」三京房
- 29) 相馬一郎・春木豊・野呂影勇(1989)「健康感尺度の作成」平成元年度科学研究費補助金(一般研究 B 63450021)研究成果報告書
- 30) 坂野雄二・東條光彦(1986)「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」『行動療法研究』12、p.73-82
- 31) 福田一彦・小林重雄(1974)日本語版 SDS、三京房
- 32) 戸ヶ崎泰子他、前掲書
- 33) 古谷野亘(1986)「生きがいの測定－改訂 PGC モラールスケールの分析」『老年社会科学』3、日本老年社会科学会、p.57-69
- 34) 坂野雄二・東條光彦(1993)「セルフ・エフィカシー尺度」上里一郎監修『心理アセスメントハンドブック』西村書店、p.478-489
- 35) 園田順一他(2001)「高齢者の自己効力感に関する研究」『九州保健福祉大学研究紀要(2)』九州保健福祉大学、p.137-142
- 36) 吉尾千世子他(2004)「高齢者の自己効力感と生きがい感に関する研究」『人間科学論究』常盤大学大学院、p.167-181
- 37) 竹中晃二・上地広昭(2002)「身体活動、運動関連研究におけるセルフエフィカシー測定尺度」『体育学研究』47(3)、日本体育学会、p.209-229
- 38) 戸ヶ崎泰子他、前掲書

井上直子：スクールソーシャルワーク実践におけるアセスメント研究

資料1 ソーシャルワーク教育支援ツールの内容

I 人間 1 当事者 (1) 特性		II 環境 3 周辺 (5) 近辺	
<b>A 個別特性</b>	1 人に対する思いやりが大切だと考えていますか。 2 約束や規則を守るなどの対応はできていますか。 3 周りの人々との関係づくりを心がけていますか。 4 物事に関心や興味を示していますか。	<b>A 近親</b>	1 近親者との付き合いに関心がありますか。 2 近親者が理解してくれませんか。 3 近親者の協力を期待することはできませんか。 4 近親者の協力が得られるよう何か配慮していますか。
<b>B 自己認識</b>	1 今の自分自身に満足していますか。 2 今の自分自身を理解していますか。 3 自分自身の考えや意見を持っていますか。 4 自分自身を変えようとしていますか。	<b>B 近隣</b>	1 近隣の人びととの付き合いに関心がありますか。 2 近隣の人びとは理解してくれませんか。 3 近隣の人びとの協力を期待することはできませんか。 4 近隣の人びとの理解や協力が得られるよう何か配慮していますか。
<b>C 社会認識</b>	1 人びとの出会いや世間の出来事などに関心はありますか。 2 世間の出来事や社会の動きに理解や知識はありますか。 3 世間の動きや社会の変化についていく気持ちはありますか。 4 近隣や地域などの催しや活動に関心や協力しようとしていますか。	<b>C 友人</b>	1 友人や知人との付き合いに関心がありますか。 2 友人や知人は理解してくれませんか。 3 友人や知人の協力を期待することはできませんか。 4 友人や知人の協力が得られるよう何か配慮していますか。
<b>D 社会的自律性</b>	1 自分で判断して行動する姿勢や態度を持っていますか。 2 周りを見ながら物事を理解していますか。 3 問題解決に取り組む気持ちや意欲を持っていますか。 4 周りを見ながら行動しようとしていますか。	<b>D ボランティア</b>	1 ボランティアの活動に理解や関心がありますか。 2 ボランティアの理解や協力を得ていますか。 3 ボランティアの有効な活用が期待できますか。 4 ボランティアの支援を得るために何か工夫していますか。
(2) 問題		(6) 資源	
<b>A 焦点</b>	1 問題に向き合おうと考えていますか。 2 問題のいきつや核心を理解していますか。 3 問題への取組みを改善することが期待できますか。 4 問題への対応は進展していますか。	<b>A 支援施策</b>	1 社会福祉のいろいろなサービスに関心を持っていますか。 2 社会福祉のサービスの内容や利用方法を理解していますか。 3 社会福祉のサービスをもっと利用できると考えていますか。 4 社会福祉のサービスを活用するために何か工夫していますか。
<b>B 障碍</b>	1 社会生活で困難や不都合を感じていますか。 2 社会生活で困難や不都合が生じる理由を理解していますか。 3 社会生活で生じる困難や不都合の軽減が期待できますか。 4 社会生活での困難や不都合の軽減に工夫していますか。	<b>B 施設機関</b>	1 社会福祉の施設や機関などに関心を持っていますか。 2 社会福祉の施設や機関などの仕事や役割を理解していますか。 3 社会福祉の施設や機関などの利用をもっと期待していますか。 4 社会福祉の施設や機関などのつながりを何か工夫していますか。
<b>C 緊急性</b>	1 問題への対応が緊急だと考えていますか。 2 問題の緊急性について理解していますか。 3 問題への緊急性の緩和が期待できますか。 4 問題の緊急性への対応を何か工夫していますか。	<b>C 行政</b>	1 役所や窓口の対応に親しみを感ずませんか。 2 役所などの仕事や役割を理解していますか。 3 役所などの情報やサービスをもっと利用できると考えていますか。 4 役所などを利用するのに何か工夫していますか。
<b>D 具体性</b>	1 問題との取り組みに意欲や関心がありますか。 2 問題解決のために原因や経過を理解していますか。 3 問題の改善や解決が期待できますか。 4 問題の改善や解決へ何か工夫していますか。	<b>D コミュニティ</b>	1 地域にある社会福祉のサービスに関心を持っていますか。 2 地域にある社会福祉サービスの内容や利用方法を理解していますか。 3 地域にある社会福祉サービスの利用に期待していますか。 4 地域の社会福祉サービスとのつながりを何か工夫していますか。
2 基盤 (3) 身辺		4 支援 (7) 機関	
<b>A 健康</b>	1 心身の健康状態に関心を持っていますか。 2 心身の健康状態を理解していますか。 3 心身の健康に留意した生活をしていますか。 4 心身の健康の維持・増進にむけて何か対応していますか。	<b>A ソーシャルワーカー</b>	1 ソーシャルワーカーの支援やサービスに満足していますか。 2 ソーシャルワーカーの仕事や役割を理解していますか。 3 ソーシャルワーカーとともに問題の解決を図ることができませんか。 4 ソーシャルワーカーにニーズを伝えるよう工夫していますか。
<b>B 生計</b>	1 生計の安定に関心を持っていますか。 2 生計が安定していますか。 3 生計を改善する見通しはありますか。 4 生計を改善するために何か工夫していますか。	<b>B 他職種</b>	1 関連領域の専門家の仕事や役割に関心を持っていますか。 2 関連領域の専門家の仕事や役割について理解していますか。 3 関連領域の専門家の協力やサービスの活用を期待していますか。 4 関連領域の専門家とのつながりに何か工夫していますか。
<b>C 住居</b>	1 住まいに関心を持っていますか。 2 今の住まいは快適ですか。 3 住まいを居心地のいいものになろうと思っていますか。 4 住み心地をよくするために何か工夫していますか。	<b>C サービス</b>	1 提供されるサービスに満足していますか。 2 サービスの意味や内容を理解していますか。 3 提供されるサービスが役立つように利用していますか。 4 ニーズにあったサービスを受けるために何か工夫していますか。
<b>D 生活環境</b>	1 暮らしやすい生活環境が大切だと考えていますか。 2 今の生活環境は暮らしやすいですか。 3 生活環境の改善を期待していますか。 4 暮らしやすい生活環境にするために何か工夫していますか。	<b>D アクセス</b>	1 施設機関のサービスなどが利用しやすいですか。 2 施設機関などが利用しやすい場所や条件を持っていますか。 3 施設機関などの有効な利用を期待していますか。 4 施設機関などの有効利用について何か工夫していますか。
(4) 家族		(8) ネットワーク	
<b>A 理解</b>	1 家族に相互理解や協力が大切だと考えていますか。 2 家族はお互いのことを考え理解し合っていますか。 3 家族が相互に話し合いを深めようとしていますか。 4 家族が理解や協力を深めるために何か工夫していますか。	<b>A 私的NW</b>	1 身近な人たちの理解や協力の輪を感じていますか。 2 身近な人たちの支援ネットワークを利用していますか。 3 身近な人たちの支援ネットワークは役に立っていますか。 4 身近な人たちとのつながりに対して何か工夫していますか。
<b>B 連帯</b>	1 家族のまとまりや協力が大切だと考えていますか。 2 家族が役割の分担などで協力していますか。 3 家族が支え合いをもっと協力することができると考えられますか。 4 家族の生活やまとまりをよくするために何か工夫していますか。	<b>B ピアNW</b>	1 相談し合える仲間が必要だと考えていますか。 2 相談し合える仲間の理解や協力を得ていますか。 3 相談し合える仲間のネットワークを役立つように利用していますか。 4 相談し合える仲間づくりに何か工夫していますか。
<b>C 意欲</b>	1 家族が問題解決への意欲を持っていますか。 2 家族が解決を必要とする問題を理解していますか。 3 家族による問題解決への協力が期待できますか。 4 家族が問題解決に取り組むために何か工夫していますか。	<b>C 機関NW</b>	1 機関と専門家などの協働したネットワークを理解していますか。 2 機関の協働したネットワーク・サービスを利用していますか。 3 機関の協働したネットワーク・サービスが役に立っていますか。 4 機関が協働したネットワークに何か働きかけていますか。
<b>D 社会性</b>	1 家族は周りの人びととの付き合いや交流に関心がありますか。 2 家族が周りの人びとと交流する意義を理解していますか。 3 家族による周りの人びととの交流や協力が期待できますか。 4 家族が周りの人びととの交流や協力を工夫していますか。	<b>D 地域NW</b>	1 地域ぐるみの協働したネットワークを理解していますか。 2 地域ぐるみのネットワーク・サービスを利用していますか。 3 地域ぐるみのネットワーク・サービスが役に立っていますか。 4 地域ぐるみのネットワークに何か働きかけていますか。